

仁王門 (重要文化財)



朱振りの仁王尊

東大寺の別当道恕上人の書

説明文

文政13年(1830)に建立された八脚門で、正面向かって左側には密迹金剛、右側には那羅延金剛が安置され、境内の入り口である山門にあって、諸堂伽藍を守っております。特にこの二尊は昔から「朱振りの仁王尊」といわれ信仰されています。また裏仏には、左側に人々に福德をさずける多聞天を、右側には仏心を起こさせる廣目天を安置しております。屋根は入母屋造銅板葺で、正面に大きな千鳥破風、背面に軒唐破風を付けています。組物は三手先の詰組とし、軒を二軒の扇垂木としているところなど、八脚門としては類例が少なく、材料工法とも極めて優秀で江戸時代末期の特色をいかに発揮した建物といえます。頭貫上の各柱間には、後藤亀之介作の竹林の七賢人や司馬温公瓶割り等の彫刻が施されています。なお正面に掲げられている。

「成田山」の大額は東大寺の別当道恕上人(べつとうどうじょしょうにん)の筆になります。

朱振りの仁王尊彩色の技法である朱摺りの仁王尊の誤伝かも(新修成田山史より)

「朱塗りの仁王尊」かも?—私説 【道恕】どうじょ 1668-1733 江戸時代前期-中期の僧
 修理履歴 永禄の昔(1688-1704)再建 元禄15年(1702年)再建 1804年再建
 1822年取り崩し再建にかかり文政11年(1828年)大修理 1831年現在の姿
 1978年(35年前)に修復

成田山 HP 及び新修成田山史には天保2年(1831年)再建とある。

私は1831年再建説です。



那羅延金剛(阿形)

密迹金剛(吽形)

多聞天(邪鬼)

広目天

現在は色あせている仁王尊

裏仏の四天王の二尊

多聞天、広目天は宝永3年(1706年)佐倉藩主稲葉正通氏寄進 文政6年(1823年)修理

大提灯 金属製（砲金）で直径 2.4 メートル（8 尺）、高さ 2.8 メートル、総重量 800 キロ
軽自動車一台程の重さである。雷門の提灯は因州和紙で出来ている為、約 500kg である。

{砲金} 銅と錫(すず)、あるいは銅と錫・亜鉛との合金。青銅の一種



「魚がし」の文字が書かれている



魚の絵と市場の文字

1804 年に日本橋の小田原町有志(旧日本橋魚河岸講) 連続して今日に至ると云う記録があり
魚河岸が仁王門に大提灯を奉納するのは古くからの伝統で、安政 6 年（1859 年）に二代目広重
が描いた「下総成田山境内図」にも、「魚河岸」と書かれた大提灯が描かれています。

最も古いものとして永禄の頃（1560 年頃）という記録が残っています。（昭和初期には提灯はない）

身代り御守り

天保元年末、本山において仁王門建立工事が起工された。翌 2 年 3 月上棟式の当日、棟梁
以下職人一同に対し祝儀の饗宴があり、職人衆は上機嫌となったが、もう一仕事と言うことで
各自持ち場に着いた。その折り神田末広町の大工辰五郎が、長梯子を登って上層の足場に移ろ
うとしたとき、足を踏み外し十六・七メートル下へと転落した。

高所からの墜落のため、命は無いと居合わせたものが駆けつけてみると、なんと辰五郎は
かすり傷一つ負わず無事であった。余りの奇跡に人々は、辰五郎の身体を調べたところ、
大工の辰五郎の懐の焼印を押した手形が真二つに割れていた、これが身代わりお守りの
始まりで戦時中は出征時のお守りとして人気があった。



【竜馬】（りゅうま*りゅうめ） 注（りょうま*りゅうぼとは読まない）

非常に足の速いすぐれた馬。駿馬(しゅんめ、しゅんば)。

東西の頭貫には龍馬（りゅうま*りゅうめ）の二頭あり（頭が龍で足は馬）

竜馬(りゅうめ)の躰(つまず)き

“竜馬”は足の速い俊馬のこと。走ることを得意とする名馬でも、ときにはつまずくことがある
ように、どんなに優秀な者も失敗することはある、というたとえ。

類「弘法にも筆の誤り」「釈迦にも経の読み違い」「文殊も知恵のこぼれ」「猿も木から落ちる」

「上手の手から水が漏る」「粹(すい)が川にはまる」「千慮の一失」(せんりよのいっしつ)

「河童の川流れ」

琴 棋 書 画



琴



碁 碁



書 道



絵 画



司馬温公の瓶割り

司馬温公の瓶割り【しばおんこうのかめわり】

温公は司馬光（しば こう）といい「資治通鑑」を書いた学者として知られています。

1019年-1086年 中国北宋代の儒学者 歴史家 政治家

子供の頃、大きな水瓶に落ちた友達を助けるために、石で瓶を割りました。

大切な瓶を割ったので叱られることを覚悟していましたが、父親は温公をほめて、改めて命の大切さを教えたと言います。

成田山の一切経堂、日光東照宮の陽面門にも同じ様な彫刻があります。

竹林の七賢人（ちくりんのしちけんじん）とは、下記の七人の称。

阮籍（げんせき）リーダー 嵇康（けいこう）山濤（さんとう）劉伶（りゅうれい）

阮咸（げんかん）向秀（しょうしゅう）王戎（おうじゅう）の七名

3世紀の中国・魏（三国時代）の時代末期に、酒を飲んだり清談を行ったりと交遊した。

阮籍は碁碁を打っていて母の死を聞いたが碁碁を打ち続けたと言われている。碁碁の彫刻が竹林の七賢人との説明であるが、私は疑問を感じる。竹林が見えない。（別項で説明したい）

琴 棋 書 画

「碁」という字は本来「棋・碁」の異体字で、意味も発音も同じだった。

現在も中国では「**圍碁（圍碁）**」と書く。

琴 棋 書 画（きんきしょが）お琴、碁碁、書道、絵画は文雅の士（ぶんがのし）の四つの遊びで中国では昔、士大夫と言われる人々は琴棋書画の四つの芸事ぐらいは、たしなむことと言われていた。

文 雅=詩文を作り、歌を詠む風流の道。 風流なこと。

士大夫（したいふ）（支配階級 知識階級 上流階級など呼んだ）

中国における支配階級の称（しょう）=古代社会に[天子諸・侯・大夫・士・庶民]の5階層があったという伝えに基づく。士以上は支配階級に属し、君主の庶民統治を助けるものである。

わらじの奉納

健脚の神様とも言われ、大きなワラジを奉納することもあります。
伊勢参りの無事を願った参拝者や健脚を祈願した飛脚らが「わらじ」を奉納したのが始まりのようです。



浅草寺（大わらじ奉納）

宝蔵門が再建され、村山市出身の彫刻家・村岡久作と錦戸新観の両仏師の仁王尊像が宝蔵門に安置されたことを記念し大わらじを奉納した。

高さ 4.5 m・幅 1.5 m、重さ 500 kg、（山形県村山市寄進）

伊勢参りの無事を願った参拝者や健脚を祈願した飛脚らがわらじを奉納した。



羽黒神社

信夫三山暁参りの時に（二月）片方を奉納し

福島わらじ祭りの時に（八月）もう一方奉納 長さ12m 重さ2トン

雷門（かみなりもん）は、浅草寺の山門。正式の名称は、風雷神門（ふうらいじんもん）
1960年、松下電器産業（現パナソニック）の創設者、松下幸之助が病気だったところに浅草寺に
拝んだ。そして、治ったためそのお礼として門及び大提灯を寄進した。風神・雷神像は、江戸時
代の頭部（火災により焼け残ったもの）に、明治時代に造られた胴体をつなげた物を引き続き
使っている。雷門の提灯は因州和紙で出来て居り台風、強風、三社祭等の時は折りたたむ。

（大きさは成田山仁王門の提灯より大きい軽い。約500Kg）

高橋堤燈株式会社（京都）が制作また張替修理も実施する。因州和紙（鳥取）を使用している。

毘沙門天

上杉謙信と毘沙門天

毘沙門天（別名：多聞天）は、仏法で世界の中心にあるとされる須弥山の北方を守護する
神で、**財宝・子宝・戦勝**の加護があるとされた。もちろん上杉謙信は、三番目に挙げた
「戦勝の加護」がある神として、すなわち武神として毘沙門天を信仰したのである。
上杉謙信の毘沙門天信仰への入れ込みようは大変なもので、自らの居城・春日山城に、
わざわざ“毘沙門丸”と呼ばれる区域を設け、そこに毘沙門堂を置き、毘沙門天画像を
祀ったといわれる。

自分は毘沙門天の生まれ変わりだと信じていたようです。戦の神である毘沙門天を
自分の前世だとする、戦国時代の最強の武将です。

多聞天が足で踏みつけているのは**邪鬼**で、仏教に敵対する邪悪なものを表している。

仁王さま

仁王様は、主に山門の左右に安置される伽藍（がらん）と仏様の守護神です。

門衛のように二体置かれるところから二王とも書きます。

阿吽の呼吸

通常、門に向かって右が口を開けた阿形（あぎょう）像、左が口を結んだ吽形（うんぎょう）像です。
阿吽の阿は口を開くとき最初に出てくる音で始まりを表わし、吽は口を閉じた最後の音で
終わりを表わします。この二字ですべての事柄の成り立ちを集約する考え方です。

仁王門左右天井の龍の墨絵は杉野嵩雲（すぎのすううん）の筆（しかし現在は見当たらない）